

なぜ、彼らは「お役所仕事」を変えられたのか？ 加藤 年紀（著）公務員には、世の中を変える力がある。

【COLUMN1】世界は変わっている。公務員も変わらなければならない/倉田哲郎(箕面市長)71頁・

・リンク・

お役所仕事を変えられる

・ takita.synapse.kagoshima.jp/takita/naze,kareraha_oyakusyawokaeraretanoka.html

2024/01/13 7:44・

#04 学びと実践の先に、突破口は必ずある・鈴木浩之(神奈川県)/ 児童虐待・72頁・

第2章 どんな仕事もできる・学びと実践の先に、突破口は必ずある・

・ すずきひろゆき・神奈川県・72頁・

・ 1960年生まれ。元神奈川県中央児童相談所虐待対策支援課長。法務局矯正局瀬戸少年院法務教官を経て、1985年、神奈川県に福祉職として入庁市、主に児童福祉司として児童相談所に勤務。児童虐待対応における先駆的手法である「サインズ・オブ・セーフティ」導入を進め、現場での実践と研究、普及活動を行う。

・ また、虐待に至った保護者に直接インタビューをし、支援のヒントを得るべく論文をまとめ、日本社会福祉学会で奨励賞を受賞。2019年4月より立正大学社会福祉学部社会福祉学科で准教授を務める。

・ 主な著書に、「ファミリーグループ・カンファレンス入門」「子供虐待対応におけるサイエンス・オブ・セーフティ・アプローチ実践ガイド」(共に共編著、明石書店)がある。臨床心理士、社会福祉士。

・ 73頁・行政にはさまざまな領域の業務が存在する。中でもセーフティネットとして市民を救い。

・ 福祉職の中でも、近年、児童虐待の環境変化はめまぐるしく、大きな注目を集めるようになった。児童虐待への対応は行政サービスの中でも異質な面がある。家族への介入によって強い対立が生まれたり、関わることを拒否されることも珍しくない。

・ そのため、多くの現場職員は強いストレスにさらされ、悩みや葛藤を抱えながら職務を全うしている。

・ 過酷な環境化にもかかわらず、業務品質の向上をめざし、先駆的な対応手法を

導入したのが鈴木浩之だ。すべての業務領域における改善の希望となるであろう、鈴木の取組みを追ってみたい。

・ 根本的な課題を捉え、本質的な解決策を問い

続ける・

・鈴木のキャリアは国家公務員として始まった。1983年に新卒で入省した法務省時代の経験が、後に児童虐待の対応へと没頭するきっかけとなった。

・「少年院の教官を2年間務め、そのときにいろんな子どもたちと出会って児童に関心を持ちました。当時、虐待はあまり問題にされていませんでしたが、今考えれば虐待を受け

・74頁・12/7/2023 12:02:42 AM

・範囲の仕事を担う。

「だことが、走行という行動に表れていたのだと思います」

児童相談所の仕事に就いたのは、35歳の時だった。

・「妻が千葉県の教員をやっていましたが、私は国の職員だったので全国転勤もありました。ですので、もし、どちらかが辞めるとなると、私かなと思っていたんです。そんなときにちょうど神奈川の福祉職の試験を見つけて、35歳のときから働くことになりました。県では身体障がいを持つ方のケアワーカーを4年、児童養護施設で6年仕事をして、以降、35歳くらいから20年以上児童相談所で働きました」

・鈴木は児童相談所のキャリアの最後に、虐待対策支援課。この虐待対策支援課は神奈川県特有のものだという。

・「虐待対策支援課は、現場で直接的に虐待対応をするわけではありません。主に神奈川県所管の5つの児童相談所をさまざまな専門機能でバックアップする役割を果たしています。

・たとえば、虐待を受けた子どもや虐待をしてしまった親に対して、医学的なセカンドオピニオンを提供する。子どものけがについて法医学者に説明を依頼する。親の精神医学的なアセスメントを行える体制を支援することもあります」。

・これだけではない。職員への研修や児童虐待の現場の調査研究、里親業務の統括など広範囲の仕事を担う。

・75頁・

・「新しい手法を企画・実践することも役割の1つで、性的虐待等を受けた子どもに対して司法面接を導入する試みも行いました。事件化してしまったケースでは、虐待を受けた子どもが、何度も面接調査を受けるため、大きな精神的な負担がありました。なるべく子どもに負担をかけない面接法の導入は、現在の三機関協同面接につながっています」

・児童虐待は、平成の時代とともにその致が急増した。1990(平成2)年度に全国で約1100件だった対応件数は、2017(平成29)年度には約13万件超を数えた。

約30年で、実に100個以上に膨らんだ。

・その大きな要因は、市民の虐待に対する意識の変化だ。1990年に子どもの権利条約が批准され、2000年には児童虐待の防止等に関する法律が制定された。かつては問題視されていなかったことが、時代の流れの中で子どもの人権侵害だと捉えられるようになった。

・「2005年からものすごい勢いで虐待の通告件数が増えてきました。昨今では、子どもが夫婦間暴力を見ることが心理的虐待とされ、件数の半分以上を占めています。

・一方、時代とともに児童相談所の対応にも変化があります。従来よりも保護者に対して毅然と対応し、積極的に一時保護を行うことが求められるようになりました。

・76頁・12/7/2023 12:56:18 AM

・子どもが極めて危険な状況では、令状を取って立ち入る「臨検索」にも対応できるよう、現場担当者向けの実践的な研修も行っています」

・近年、子どもや親の意志に反してでも、強制的に保護する事例が増えている。また、児童相談所が警察や司法と連携し、厳格な対応を進める必要性もうたわれるようになった。

・もちろん、保護をしなければ、子どもの命を守れないケースもある。しかし、一時保護によって根本的な問題が解決するわけではない。この狭間で鈴木は常に葛藤していた。

・「一時保護をただで、子どもが夢や希望を持って生きていけるわけではありません。

・子どもは親と離れたいわけではなくて、虐待のない世界で生きていただけですよね。

・危機介入や一時保護だけではそれを実現できないのではないかと。そう感じて、いつもモヤモヤしていました」

家族に寄り添うことを可能とする、海外手法の導入

・こうした苦悩の中で出会ったのが、オーストラリアで開発された「サインズ・オブ・セーフティ」と呼ばれる対応手法だ。

・77頁・

・「サインズ・オブ・セーフティを端的に言えば、本来、悩むべき家族が『悩める』ように支援することです」

・家族が悩むということは、家族が主体者として虐待と向き合うことを意味す

る。

・「私たちは虐待を起こさせないために、保護者を強い権限で指導していく歴史を辿りました。今もまだそういう傾向はあると思います。

・「だけど、本当に子どもの安全を守ることができるのは、家族しかいないと思っているんです。我々がどんな指導をしたところで、家族が子どものことを自分事として考えなければ、状況は何も改善していかないと考えたんです」

「児童相談所は常に悩みながら仕事をしています。しかし、本来、児童相談所よりも家族が悩む必要があると思うんです。家族が悩む機会を奪うことは、家族をエンパワーするどころか逆にディスパワーしてしまうことにもなります。そんな葛藤の解決策が、サインズ・オブ・セーフティでした」

・78頁・ ・12/7/2023 4:59:41 AM

・親が虐待を繰り返さないように「指導」するのではない。サインズ・オブ・セーフティは異なる角度からアプローチを行う。

・「サインズ・オブ・セーフティを和訳したら「安全のサイン」ですよね。家族が持っている安全を守る力を引き出し、可視化することで、子どもにとって安全な環境をつくるという考え方があるんです。

・まず、「虐待が続くと、子どもの未来にどのような危険が待っているのか」を家族と共存します。その前提があるから、「子どもの安全な未来」という目標を家族と設定できるんです。

・そこに一緒に向かって行くことで、児童相談所の職員が子どもの安全づくりに役立つようとしている存在だと伝わります」

・児童相談所は家族に寄り添い、支援する役割を担う。

「虐待をしてしまう保護者は、大きな不安を抱えているんです。子育てで行き詰まったときに、暴力によって子どもをコントロールしようとしてしまう。一時的に子どもは言うことを聞くかもしれませんが、だんだん、叩いても抑えきれなくなってくるんです。そうすると、今度はもっと過激な暴力が振るわれる。その悪循環に陥らないように同じゴールをめざす必要があるんです」

・80頁・

・取組みの成果を可視化し、分析を繰り返す

・「以前は、子どもが安全な状態であるという基準は、明確ではありませんでした。しかし、サインズ・オブ・セーフティでは安全の基準を定義することで、その基準を満たすことであれば、子どもが家庭の中で安全に暮らすことができるんです。これも、児童が相談所が家族と同じ方向をめざすことのできる一因です。

・安全の基準にはいくつかの定義がありますが、子どもを守る仕組みとして、家族以外の力を借りることも多くあります。親族や友人・知人が虐待を防げる

ように仕組みづくりをしておくのです」

・具体的な対策のイメージを聞いた。

・「他人に助けを求めるのは気がひけますよね。そこで、たとえば、子ども用に携帯電話を買ってもらって安全を守れる人を登録し、危険が迫ったときに発信できるようにします。

・あらかじめ保護者がセーフティ・パーソンとなってもらえる人を何とか探し出して、いざというときに電話ができる相手を確認します。さらに、誰かが駆けつけてくれるまでに、逃げられる場所を確認する計画も必要かもしれません。家に安全なスペースをつくってもいいし、近所の家に入れてもらうのでもいい。セーフティ・パーソンという新たな人物を加えて、危険を回せる具体的な仕組みを、家族自身がつくり上げることがポイントです」

・80頁・12/7/2023 5:28:22 AM

・誰かが定期的に家庭訪問をして、安全を確認するケースもあるという。それぞれの家族の状況に合わせて、虐待の起こらない環境を構築している。

・「保護者の変化によるものだけで、虐待の発生を防ぐのではありません。もちろん、保護者が変わることは重要ですが、それに頼り切ると、子どもにリスクが生じます。アルコール中毒のお父さんがお酒を飲んで帰ってきたとしても、虐待に巻き込まれない環境構築こそが、安全の仕組みと呼べるのです」

・可能性を感じて始めたサインズ・オブ・セーフティ。その成果は数値として表れた。

・「鎌倉三浦地域児童相談所に配属されていたときに、組織全体でサインズ・オブ・セーフティに取り組み、約4年間の統計を取ったことがあります。その結果、一時保護の期間が平均1か月から約半分になりました。家族が必死になって安全づくりを進めたため、1日で子どもを帰したケースもあります」

・1日というのは驚きだ。リスクはないのだろうか。「サインズ・オブ・セーフティでは保護した期間が重要なのではなく、安全が確保されているかどうかの方が大切なんです。安全な仕組みを構築したら、1日で帰してもらうこともできる。だからこそ、保護者が必死に向き合うようになるんです」

・81頁・

・保護期間が短縮された要因が、すべてサインズ・オブ・セーフティによる成果とは断定できないと、鈴木は冷静に振り返る。しかし、その表情からは静かな自信がうかがえた。

・鈴木 of 謙虚さと緻密さを象徴する言葉が続く。

・「もともと、サインズ・オブ・セーフティの概念に近い仕事をしていた職員もいますし、課長であった私がリーダーシップを取って、一時保護の期間を減らす方針を取っていました。ですので、次のステージでは、もっと精度の高い

純粋な統計情報が必要だと思っています」

・新たな取組みを進めるには、過去を否定しない

・組織の中で新しいことに取り組む 反発はなかったのだろうか。

・「もちろん、何かを始めようとすると、多くの場合、反発があると思います。ただ、『良い実践をしたら、子どもや家族の役に立つ』というのは、いろんな立場を超えて

・82頁・12/7/2023 5:39:49 AM

・

・鈴木は過去を否定しないことを心がけた。

「先輩の業務の中に含まれていたサインズ・オブ・セーフティの関素をまとめて、広めることもありました。過去の歴史の中には、新しい取組みと共通の方向性が必ず存在します。それを見つけて強調することが大切なのです」

・最近では「改革」という表現を避け、「アップデート」といった表現が使われることも増えた。「改革」だと過去を否定するニュアンスが生じてしまうからだ。

忘れられない一言「お前が担当する子どもは不幸だ」

・児童相談所で働き始めてから、鈴木は自らの活動を外部へと発信するようになった。自分たちだけで実践して終わりだと、ノウハウは周りへは広がらない。そこで鈴木は実践内容を理論やモデルケースに落とし込み、外部の職員でも使える形にかみ砕いていった。

・「毎月、実践家や研究者と一緒に研修や勉強会を開催しました。また、現場に近い立場を活かして、虐待に至った保護者に直接インタビューをし、支援のヒントをまとめた論文を書きました」

・83頁・

・論文の1つは、日本社会福祉学会の奨励賞を受賞した。忙しい日々の中、鈴木は土日や通勤時間を使って論文を執筆する。その努力の裏には、悔しさを抱える原体験があった。

・「私が児童相談所に来たのは歳の頃です。もともと福祉関係の仕事をしていたので、自分の中ではそれなりに福祉について学んできたつもりでした。でも、児童相談所では自分の知識がまったく役に立たなかったんです。そもそも、同僚が話している内容すら理解できませんでした」

・先輩から厳しい言葉を投げかけられ、傷ついたこともあった。

「『お前が担当する子どもは不幸だ』と言われたときは、すごくショックでした。実際、「私じゃなかったら、もっとうまく話が進んだかな」と、腑に落ちる部分もあったんです。そういう体験をして「こんなところで終わるのは悔しい」と思ったときに、私の選んだ道は勉強することだったんです」

・鈴木は自らの劣等感を埋めるために、心理学を学び始める。2年間、平日の夜と土曜日に学校へ通うことで、新たな視点も獲得した。「最初は自分の存在意義を確認するために研究を始めたんです。でも、やがて、実務を担う中でも、研究が必要だと思うようになりました。本来、現場と研究は一對のものなんです。お互いに行ったり来たりしないと、どちらも高まっていきません」

・84頁・12/7/2023 6:27:37 AM

・新たな気づきによって、自らの役割を再評価することもできた。「実務家は現場ですごく貴重な経験をしています。忙しさからあまり研究できません。でも、親御さんの言葉を代弁できるのは、現場にいる人だけです。特に虐待対応のような変化のある分野は、現場のほうが先に進んでいきます」

・コンプレックスを力に変えて成功した者は少なくないが、鈴木もまた、その一人と言える、学びへの熱量は尽きることはなかった。

・「臨床心理士の資格を30歳のときに取りました。ただ、私は心理の仕事をするためではなく、ソーシャルワークの中に心理学の要素を取り入れることで、良い仕事ができるようになると考えていました。自分の存在価値みたいなものを資格に頼るのはちょっとせこいような気もしますが(笑)、それでも自分にしかできない仕事領域を感じました」

・鈴木は自らの実践と研究が評価されるにつれて、ようやく自身のポジションを見出すことができた。しかし、当然のことながら、学びに終わりはないようだ。「仕事をしているとまたどこかで行き詰まるんです。幾度となく壁みたいなものにぶつかって、そのたびにもっと勉強が必要だと感じる。その繰り返しです(笑)」

・85頁・

・怒鳴られることも必要なプロセス

・児童相談所の仕事は大きな責任を伴うだけに、心理的な負荷もまた大きい。だからこそ、鈴木には忸怩たる思いがある。

・じくじ【忸怩】深く恥じ入るさま。「内心 — たるものがある」6:46 2023/12/07・

・「私は児童相談所を人気がある職場にしたいと思っています。もちろん、児童相談所は厳しい職場です。夜中や休みも関係なく、保護した子ども

を、「返せ! 返せ! 返せ!」と怒鳴られることだってあります。でも、安全が確保できていなければ、返すことはできません。そのままずっと怒鳴られ続けると思うと、若手にとっては耐えがたいものになります」

・厳しい環境を乗り切るために、1つひとつのプロセスに意味づけが必要だと、鈴木は主張する。

・怒鳴られてた先に、家族と一緒に世界が見えたりすることもあるんです。怒鳴られていることも1つのプロセスだと考える。「今この段階にいるんだな」って俯瞰して見ることができれば、怒鳴られても頑張れるじゃないですか」

・86頁・12/7/2023 6:38:12 AM

・児童福祉の現場では、今も多くの職員が日々奮闘している。2018年、そうした同僚、後輩たちにスキルを伝えるため、鈴木は研究者らと「サインズ・オブ・セーフティ+(プラス) ネットワーク」を立ち上げた。

・「自分は何も役に立ってないと感じることもありますが、決してそんなことはありません。うまくいっていないと思っている実践の中にも、うまくいっていることが必ず、あります。家族とすったもんだしながらやっている中には、彼らにとって役に立っていることが必ずあるんです」

・2019年3月、鈴木は神奈川県を退職し、翌4月から立正大学で教鞭をとる。新天地に行っても、児童相談所で働く仲間への想いは変わらない。

・「児童相談所の仕事は本当に大変な仕事です。だからこそ、そこで働く職員は、世の中で大切な役割を果たせていると思います。これからも、児童相談所の仕事に魅力を感じて取り組み人が増える一助になればと思います」

・実務のあるところには、研究の余地が必ずある。そして、研究の余地があるところには改善の余地が必ずあるのだ。

・87頁・

・鈴木浩之・に学ぶ・役所でやりたいことを 実現するヒント・

✓ コМПレックスを力に変える・

コМПレックスをバネに成功している起業家は数多く存在する。誰しも少なからずコМПレックスはある。それにどう向き合い、どう行動するかで、仕事の成果に大きな違いが生まれる。鈴木は学び に没頭することで道を拓いた。

✓ 過去の業務の中に先進的な要素を探す・

「前例」には先進的な要素を持つ、優れた取組みも存在する。新たな取組みを進めようとするときは、適切な前例を示すことによって、組織内の理解を得ることが可能となる。

・現場は知恵の宝庫である・

・公務員は実務の中で多くの知見やデータを取得できる立場にある。しかし、その一方でデータが徹底的に検証されたり、世に公

開されることは少ない。銘木はその実践経験や統計データをもとに研究・検証を重ね、論文などの形で多くの発信を行った。

・ 88頁・ 12/7/2023 6:57:39 AM・ 終わり・

2024/01/13 7:41・